

# 帝政末期ロシアにおけるリベラル・ナシヨナリストの自己形成

——ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリャーロフ小伝——

中 嶋 毅

## はじめに

筆者はかつて「革命とロシア・インテリゲンツィヤ」と題する論文において、帝政ロシアの知的伝統を受け継いだインテリゲンツィヤが一九一七年のロシア革命期にどのように知的活動を展開したかを、当時の若き知識人ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリャーロフという人物を取り上げながら考察したことがある。<sup>(1)</sup>そこでは、この人物を対象とした理由を、彼が「その出自や自己形成の過程においても、また一九一七年の革命に対する態度や十月革命後の行動様式においても、伝統的なロシア・インテリゲンツィヤの一つの典型をなす人物」であると同時に「(革命後の)内戦の過程で思想的転換を経験し、その終結後にはソヴィエト権力に対する協力の呼びかけを積極的に展開して、いわゆる『道標転換派』の指導者となったことにみられるように、ロシアの知的伝統を独自の立場から発展させようとした人物」であった点に求めた。

本稿は、旧稿執筆時には利用できなかった最新の研究成果を用いてウストリャーロフの思想形成の過程について再考することを通じて、帝政末期からソヴィエト時代初期にかけてのロシアの知的世界の歴史的意義を考察するための

一事例を提供することを目的とするものである。筆者は長らくこの興味深い人物に関心を抱き続け、幾編かの論考を公表してきたが、本稿では特に彼の自己形成期に焦点をあてて、右の課題に接近してみたい。

まずは、この人物について改めて簡潔に紹介しよう。ニコライ・ウストリヤーロフは一八九〇年にペテルブルクに生まれ、一九〇八年にモスクワ大学法学部に入學、一九一三年に卒業し一九一六年に同学部の国法学講座の私講師に就任した。政治的には彼はカデット党（立憲民主党）に属し、十月革命の後にモスクワを離れ、一九一八年秋からはペルミ大学で教鞭をとった。その後彼は、オムスクの科尔チャーク政権の広報課長としてまたカデット党中央委員会東方支部長として、ボリシェヴィキに積極的に抵抗した。一九二〇年初頭の科尔チャーク政権の崩壊後、ウストリヤーロフはハルビンに亡命し、同年三月からハルビンの高等経済法科学学校（一九二二年からはハルビン法科大学と改称）の教授となり、一九三四年までその地位にあった。ソヴィエト・ロシアがネップへ移行したのち、彼はソヴィエト権力に協力するようになり、在外のままソヴィエト国籍を取得して一九二五年から中東鉄道学務課長、そのポストが廃止された二八年以降は中東鉄道中央図書館長の職務を勤めた。一九三五年に中東鉄道が売却された際にウストリヤーロフは、中東鉄道の他のロシア人職員たちとともにソ連に帰国し、モスクワ交通技師大学で経済地理学を教授した。しかし大テロルの中で一九三七年六月六日に逮捕され、取調べののち同年九月十四日に死刑判決を受けて即日処刑された。第一次世界大戦、ロシア革命、国内戦、亡命生活、大テロルト、歴史の激動に翻弄された生涯であった。

ウストリヤーロフとロシアの知的世界とのかかわりに関する日本と欧米の研究は、旧稿発表の時点からほとんど進展がみられない状況である。<sup>(2)</sup>一方ロシアにおいてはこれと対照的に、ウストリヤーロフに関する研究は急速に進展し、質・量ともに充実してきた。旧稿執筆時にはすでに、モスクワに住むウストリヤーロフの息子の妻が保管する個人文書を利用したペテルブルクの研究者ブイストリヤンツェヴァの伝記的研究が発表されていた。<sup>(3)</sup>その後ニジニ・ノヴゴロドの歴史家ロマノフスキーが、二〇〇六年と二〇一〇年に二冊のウストリヤーロフ伝を刊行している。<sup>(4)</sup>これはロシアで初めての本格的なウストリヤーロフ伝で、本稿では二〇一〇年の伝記を参照した。またウストリヤーロフの

故郷カルーガでは、ウストリヤーロフと彼に関する様々な歴史にさざげられた『ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリヤーロフ——カルーガ論集』が現在までに六冊刊行されている。このように、故地カルーガを中心として、ロシアでは「ウストリヤーロフ・ルネサンス」ともいえる成果が生み出されているのである。

本稿では、右の最新の研究成果に学びながら、公刊された同時代史料や新たに公表された著作を検討し、ウストリヤーロフの自己形成過程を明らかにしたい。その際、対象とする時期を、ウストリヤーロフが政治的・評論的活動を本格的に展開しはじめた一九一六年までに設定する。この時期までに形成された彼の思考様式が、一九一七年の二つのロシア革命とその後の政治的展開の中での彼の行動を規定することになったと考えるからである。

なお、本稿で利用した文献は、二編の日本語論文とウストリヤーロフ自身の著作以外は、すべて旧稿発表以後に利用可能になったものである。また、日付の記載はロシア暦（旧暦）で示されている。現在の暦法に換算するには、一九世紀では一二日を、二〇世紀では一三日を加算すればよい。

## 一 ウストリヤーロフ家の人々

ウストリヤーロフ家の出自については、先に紹介したブイストリヤンツェヴァによってその概要はすでに明らかにされていたが、その後ニコライ・ウストリヤーロフの郷里カルーガの歴史家シャーポシニコフが、ペテルブルクの公文書館史料に基づいてウストリヤーロフの家系に連なる人々の足跡を詳細に提示した。<sup>5)</sup>ここでは主にシャーポシニコフの最新の研究成果に基づいて、ウストリヤーロフの自己形成に大きな影響を与えた彼の家系をたどってみよう。

ニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリヤーロフの先祖の中で、史料の上に現れてくる最初の人物は、彼の曾祖父ゲラシム・トリーフオノヴィチ・ウストリヤーロフ（一七六六—一八三〇）である。ゲラシムは、オリョール県マロアルハンゲリスク郡ボゴロツコエにあったクラキン公爵の領地に住む農奴であった。オリョールで発表された研

究によれば、ウストリヤ・ロフ家は一八一六年時点で、家長ゲラシムが四三才、妻のヴァルヴァラは三九才、長男ニコライ（二〇才）、次男フョードル（七才）、長女アンナ（六才）、次女エリザヴェータ（四才）、三男アレクサンドル（二才半）、三女ヴェーラ（半年）の八人家族であり、クラークン家の屋敷付き農奴一家であった。ゲラシムはクラークン家のボゴロツコエ領で家令（領地管理人）を務めていたことから、一八二七年にクラークン公爵が彼を家令の職を解く際に解放したことで、一八六一年の農奴解放令のはるか以前に家族とともに自由な農民身分となったのである。<sup>⑥</sup>

家令の職を務めたことから、ゲラシムはクラークン公爵によってその能力を高く評価されたものと推測されるが、その子供たちも恵まれた才能と努力によって、そして教育機関を経由した国家勤務を通じて社会的上昇を遂げることができた。中でも有名なのは、長男ニコライと次男フョードルである。長男ニコライ・ゲラーシモヴィチ（一八〇五—一七〇）は、オリョールで中等教育を終えたのち一八二四年にペテルブルク大学を卒業して大蔵省に勤務し、二八年からは同時にペテルブルク第三男子ギムナジヤで教鞭をとった。興味深いことに、大蔵省に勤務している時期まで、ニコライ・ゲラーシモヴィチは法的には農奴のままなのであった。彼は一八三一年にペテルブルク大学のロシア史の講師となり、三六年には学位を取得して教授となった。彼はペテルブルク大学の歴史学教授を長く務め、『ニコライ一世皇帝陛下治世の歴史概説』（一八四七年刊）や『ビョートル大帝治世の歴史』全六卷（一八五九—一八六三年刊）などの著作で著名な歴史家となったのである。一方、次男のフョードル・ゲラーシモヴィチ（一八〇八—一七二）は、モスクワ大学を卒業後に交通技師学校に勤務したのちに陸軍省に移り、長年にわたって陸軍省内局で勤務して昇進を遂げ、三等文官の官等を授与された優秀な官僚であった。<sup>⑧</sup>

バイストリヤンツェヴァは、大伯父ニコライ・ゲラーシモヴィチがニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリヤ・ロフに及ぼした思想的・知的影響を推測している。彼女によれば、歴史家としての二人には、事実を尊重し、歴史過程の客観的法則と研究者の道徳的信念の重要性を承認する点で、共通性があるという。<sup>⑨</sup> 青少年期から社会や政治に

関心を持ち、のちに政治思想家・評論家・教育者となるニコライ・ヴァシーリエヴィチが、大伯父である偉大な歴史家から相應の影響を受けたと考えることは、あながち的外れではあるまい。

本稿の主人公ニコライ・ヴァシーリエヴィチの祖父でゲラシムの四男であつたイヴァン・ゲラーシモヴィチ（一八一八—一八六一）もまた、兄たちの優れた資質を共有していた。<sup>10</sup>父ゲラシムの死後に一家で移住したペテルブルクで、長兄ニコライも教鞭をとつた第三男子ギムナジヤを卒業したイヴァンは、ペテルブルク大学を卒業後に次兄フョードルが勤務する陸軍省に就職し、フョードルと同じ陸軍法務官の道を歩んだのである。一八五五年にカルーガ県の名誉市民コジエーヴニコフ家の娘エリザヴェータ・ミトロファーン・ヴナと結婚したイヴァンは、陸軍法規集成第二版の編纂に尽力した功績によつて、一八六一年一月一日付で聖ヴラジミール四級勲章を授与された。このときイヴァンは五等文官であつたが、おそらくは自らの死期を悟つた彼は、当該勲章授与の事実に基づいて自身と家族への世襲貴族身分付与の承認を請願した。この請願は元老院によつて審議され、イヴァンの死後の五月一二日付でイヴァンとその家族に世襲貴族身分が認められて、貴族系譜書第三部に記載される権利が与えられた。<sup>11</sup>貴族身分を獲得したものの夫を失つたイヴァンの妻エリザヴェータには、陸軍省侍従武官長であつたリハチヨフ少将の取り計らいによつて、陸軍省から年額四九〇ルーブルの終身扶助金が支給されることになつた。<sup>12</sup>

ニコライ・ヴァシーリエヴィチの父ヴァシーリー（一八五九—一九一二）は、イヴァン・ゲラーシモヴィチ・ウストリヤーロフの次男としてペテルブルクで生まれた。父イヴァンの死後、ウストリヤーロフ一家は母エリザヴェータの故郷カルーガに移住した。ヴァシーリー・ウストリヤーロフには双子の妹マリアのほか、二才年上のアンドレイと一才年上のアンナの兄弟がいた。長男アンドレイはカルーガの男子ギムナジヤを卒業後にモスクワ大学に学んだが、一八八一年一月に早世した。<sup>13</sup>一方ヴァシーリーは、男子ギムナジヤを卒業したのちにキエフの聖ヴラジミール大学医学部に学び、一八八五年に卒業して医師となつた。彼はまた同年八月に、カルーガの商人の娘ユリヤ・ペトロヴナ・エローヒナと結婚し、ペテルブルクに移り住んで医師として働いた。彼らの間にはニコライ（一八九〇—一九三七年）

とミハイル（一八九二—一九四四）の二人の息子が生まれた。<sup>(14)</sup>

一八八八年に母エリザヴェータ・ウストリヤーロヴァが死去して遺産を相続したのち、ヴァシーリー・ウストリヤーロフは一九〇〇年にペテルブルクからカルーガに一家で移住し、その地で医師としての活動を続けた。カルーガで著名な医師となった彼は、市会議員を務めたほか、教区学校監督官、市公共図書館管理委員会や衛生委員会などの委員を務め、市の名士として活躍した。ヴァシーリーは読書家で、自宅には専門の医学書はもとより自然科学、歴史、法学など様々な領域にわたる素晴らしい蔵書を有していたという。<sup>(15)</sup> 彼は一九一二年九月に重い腎炎で死去した。

ヴァシーリーの次男でニコライの弟のミハイルについても、ここで触れておこう。二才年下のミハイルは、兄と同じカルーガの男子ギムナジウムで学んだ後に、父にならってモスクワ大学医学部に進学した。第四学年終了後に彼は軍務に召集され、一九一七年一〇月まで連隊附軍医として勤務した。復員後は大学に復帰して学業を続け、一九一八年三月に国家試験に合格して医学士の学位を得てカルーガに帰郷し、その地の精神病院に長年勤務して著名な精神科医となった。兄ニコライの逮捕・処刑ののち兄の家族を庇護したミハイル・ウストリヤーロフは、結核のため一九四四年三月にカルーガで死去した。<sup>(16)</sup>

ウストリヤーロフ一族の主要な人々の足跡をたどると、教育を通じて獲得した専門知識を生かして人生の進路を切り開く力量、自らの天職を誠実に全うする真摯な姿勢、勤勉さなどの共通の特徴がみられるように思われる。政論家としてまた思想家として独自の位置を占めることになったニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリヤーロフもまた、ウストリヤーロフ家のこうした特徴を有していたのである。

## 二 ニコライ・ウストリヤーロフの自己形成

ヴァシーリー・ウストリヤーロフの長男として一八九〇年一月二五日に生まれたニコライは、一九〇〇年に地元

カールガの男子ギムナジヤに入学した。自身の回想によれば、彼は一九〇四年頃までは必ずしも政治に関心を示したわけではなかった。その彼が内政問題に関心を持つ契機となったのは、日露戦争と一九〇五年革命であった。彼は新聞や雑誌で戦争に関する情報を熱心に集め、極東での出来事を注視した。敗北主義の立場を示す社会主義者や革命家の世界は彼にとっては別世界であり、異質なものだと感じられた。しかしそれと同時に彼は、君主主義的な気分に与することはなく、当時「黒百人組主義 (Черносотенство)」と呼ばれた極右主義には全く縁遠い立場であったという<sup>(17)</sup>。一九〇五年の政治的経験は、ウストリャーロフを「明確に愛国主義的で、国家的・国民的特徴を備えた穏健な自由主義」の立場に導いた。こうして彼は、のちに『道標』と「ストルーヴェ学派」を受け入れる素地を身につけたのである<sup>(18)</sup>。

ウストリャーロフが社会問題に目を向け始めた二〇世紀初頭のロシアは、文化や芸術の領域を中心にきわめて活発な創造的活動が展開された「銀の時代」と称される時代を迎えていた。知的世界においては、マルクス主義の立場から離れて観念論に移行したベルジャエフ、ストルーヴェ、ブルガーコフ、フランクらが、ソロヴィヨフの弟子であるセルゲイとエヴゲーニーのトルベツコイ兄弟らとともに一九〇二年にモスクワで論集『観念論の諸問題』を刊行し、実証主義を批判してソロヴィヨフの宗教哲学へと傾斜していったのである。そして一九〇五年革命を挟んで、これらの人々が中心となって、一九〇九年にペテルブルクで有名な論集『道標』が刊行された。この論集は、同時代のロシア知識人に大きな衝撃を与え、広範な論争を呼び起こした<sup>(19)</sup>。

ギムナジヤの学年が進むにつれ、ウストリャーロフの政治的・思想的立場は、さらに明確な形をとるようになった。彼の父の世代がコントやミル、ダーウイン、スペンサーらによつて育まれた実証主義の世代であったのに対して、ウストリャーロフら若い世代は「銀の時代」の新たな思想潮流に魅了された。彼にとつての座右の雑誌はストルーヴェとフランクが編集する『北極星』と『自由と文化』、そしてトルベツコイの『モスクワ週報』であった<sup>(20)</sup>。政治的な面では、彼は当初エヴゲーニー・トルベツコイの影響を受けてカデット右派の立場に共感を示していたが、一九〇七年の第二国会の時期には最終的にストルーヴェやブルガーコフ流のカデットの立場に立つに至ったのである<sup>(21)</sup>。このように彼

の政治的・思想的志向の基本的な土台は、大学入学以前のギムナジヤ時代に形成されていたととらえることができる。

一九〇八年に優等の銀メダルを受けてギムナジヤを卒業したウストリヤーロフは、同年九月にモスクワ大学法学部に入学した。大学生になるとすぐに、彼は本格的に政治活動に関与し始め、カデット党学生フラクションのメンバーとなった。社会主義者にも保守派にも共感を持たなかった彼の政治的立場からすれば、西欧的な自由主義者の政党であるカデット党を活動の舞台に選んだのは自然なことであった。ウストリヤーロフ家に残されたニコライ・ヴァシリエヴィチの個人文書を調査したブイストリヤンツェヴァによれば、彼がカデット党を選択した理由は、彼がカデット党の信奉者になったというわけではなく、カデット党が「真に知的な政党、ロシア・インテリゲンツィヤの最高の代表者たちの政党」と考えたからであったという。<sup>22</sup> ウストリヤーロフは後年にも、「特に有能で知的な、いわば世襲名譽インテリゲンツィヤの若者が、カデット党学生フラクションに入った」と回想している。<sup>23</sup>

ウストリヤーロフが大学に入学した当時、学生は活発な政治活動を展開しており、様々な党派の組織が影響力を競い合っていた。彼がメンバーとなったモスクワ大学カデット党学生フラクションのリーダーはエフィモフスキーとゲオルギー・ヴェルナツキーで、後者はのちに著名な亡命歴史家となった人である。カデット党学生フラクションの活動は取り立てて危険というものではなかったが、それでも当局は取り締りの目を光らせていた。一九〇八年秋のモスクワ大学学生ストライキに関連して開催されたカデット党フラクション会議ののち、会議の参加者に対して行政当局による処分が実施され、会議に参加していたウストリヤーロフも一〇日間の拘留を経験したのである。<sup>24</sup>

当時の学生の多くが魅力を感じたのは、カデット党よりもむしろエスエル党（社会主義者＝革命家党）と社会民主労働党の社会主義政党であった。モスクワ大学においても、学生大会で最大の成功を収めるのはいつも社会主義者の弁士であった。なかでもモスクワ大学の学生の間に大きな影響力を及ぼしていたのは、社会民主主義者すなわちマルクス主義者だった。当時のマルクス主義は、学生の心をとらえ彼らを鍛える教義だったのである。<sup>25</sup> ウストリヤーロフがモスクワ大学に入学した時にマルクス主義者グループの指導者だったのは、法学部経済学科の学生ニコライ・ブ



ハーリンであった。プハーリンはマルクス主義者グループを率いて、マルクス主義の観点から観念論者と激しい論争を展開していた。<sup>(26)</sup>

一九〇九年四月にウストリヤーロフは、モスクワ大学のある学生団体で、「現代社会主義の危機」と題した報告を行っている。この報告の基本的な主張は、社会主義は唯物論的でマルクス主義的な基礎ではなく観念論的で哲学的な基礎を持たねばならないものであった。彼はすでにギムナジヤ第八学年の時代にセルゲイ・ブルガーコフの論文集『マルクス主義から観念論へ』（一九〇三年刊）を読んでおり、大学入学後にはドイツの社会民主主義者で哲学者カール・フォアレンダーの『カントと社会主義』（一九〇〇年刊）を読んで影響を受けていた。<sup>(27)</sup>フォアレンダーの著作を読んだことは、ウストリヤーロフがマールブルク学派の新カント派哲学に直接触れる契機となったものと推測される。

このように、ウストリヤーロフの政治的活動の中でも大きな位置を占めていたのが、哲学や思想、理念に対する強い関心であった。彼が入学した時期のモスクワ大学法学部とその周辺には、法学概論・法哲学講座のエヴゲーニー・トルベツコイ、パーヴェル・ノヴゴロツエフ、ボリス・ヴィシエスラフツエフら「哲学する法学者」のほか、国法学講座のセルゲイ・コトリヤレフスキー、ボグダン・キスチャコフスキー、モスクワ商業高等専門学校の政治経済学教授ブルガーコフら「銀の時代」を代表する知性が集まっていた。<sup>(28)</sup>

モスクワ大学でウストリヤーロフが師事したのは、セルゲイ・トルベツコイの弟エヴゲーニー・トルベツコイであった。トルベツコイ兄弟は一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのロシア宗教哲学界の代表的な存在で、著名な思想家、自由主義運動の活動家、指導的な評論家であるだけでなく、ウストリヤーロフと同じカルーガの男子ギムナジヤの出身でウストリヤーロフにとって身近な存在でもあった。大学入学直後からウストリヤーロフは、ソロヴィヨフに始まりドイツの批判的観念論の詳細な分析に至る最新の哲学をエヴゲーニー・トルベツコイのもとで学んだのである。後年ウストリヤーロフは、トルベツコイの「卓越した教育の才能」<sup>(29)</sup>をきわめて高く評価している。トルベツコイの演

習でウストリヤーロフは、国家法史専攻のステパン・ケチエキヤン（一八九〇—一九六七）や、十月革命後に彼と政治的行動を共にすることになる国際法専攻のユーリー・クリューチニコフ（一八八六—一九三八）、教会法専攻のニコライ・フィオレートフ（一八九一—一九四三）ら同世代の友人と出会った。<sup>30</sup>

ウストリヤーロフ自身の思想形成に大きな影響を与えていたのは、自由主義的法学者のボリス・チチエーリンであり、偉大な哲学者ウラジーミル・ソロヴィヨフであり、ソロヴィヨフの思想を支持した哲学者レフ・ロパーチンであり、宗教哲学者セルгей・トルベツコイであった。なかでもソロヴィヨフからは特に強い影響を受けており、ウストリヤーロフは一九〇九年二月の草稿の中で、「ウラジーミル・ソロヴィヨフの積極的で宗教的な世界観とわれわれの最新の文化社会思想を、現代の新カント派の批判的方法に接合することが可能であるだけでなく必要でさえある」と記していた。<sup>31</sup>興味深いことに、古い思想や価値観を単にそのまま引き継ぐのではなく、その優れた部分に異なる要素を組み合わせながら新たな状況の中で発展させようとするウストリヤーロフの発想を、早くもここに見出すことができる。こうして彼は、西洋とロシアを新たな次元で総合しようとする視角を獲得したのである。

学生時代のウストリヤーロフは、専門の法学や哲学の研究と政治的活動に精力的に従事しただけでなく、評論活動にも関心を示しており、学生時代から新聞や雑誌に寄稿していた。彼の最初の論文「果てしないテーマへの不十分な見解」は、ペテルブルクの雑誌『知識通報（Вестник знаний）』の一九〇九年第八・九合併号に掲載されたもので、この論文は超時性と時間、意識的なものと無意識のもの、直感的なものとは合理的なもの、といった人間存在の複雑な諸問題を扱っていた。その後もこの雑誌のほかに、モスクワの学生向け新聞『学生生活（Студенческая жизнь）』や雑誌『学生問題（Студенческое дело）』に寄稿して、幾つかの論文を発表した。<sup>32</sup>学生時代の文筆修行は、のちの政論家・評論家ウストリヤーロフにとって、実践的な経験を積む格好の場となったものと推測される。

一九一一年にトルベツコイが大学を辞職してから、法学概論・法哲学講座のヴィシエスラフツェフの指導下で学業を続けていたウストリヤーロフは、一九一三年の春、卒業の時期を迎えた。彼は法学部の法学概論・法哲学講座に「歴

史に表われた倫理ミニマムとしての法理論」と題する四二一頁の卒業論文を提出し、国家試験にも合格して同年六月に第一級卒業証書を授与された。<sup>33</sup> 講座主任のヴィシエスラフツェフはウストリヤローフに対して教授資格取得のため大学にとどまることを薦め、彼は二年間モスクワ大学で研究を継続することになったのである。

### 三 若き自由主義者の成長

ウストリヤローフが大学を卒業した一九一三年からロシア革命直前の一九一六年の時期は、外見的には安定しているかに思われたロシアが世界戦争に突入し、政治的にも社会的にも混乱の度合いを深めて体制の危機に至る時代であった。しかしウストリヤローフにとってこの時期は、自立した研究者としてだけでなく自立した思想家・評論家としての成長期であり、価値観の混乱のなかで自身の思想の骨格を確立する実り多い時代であった。

一九一四年の春、ウストリヤローフは大学からヨーロッパ留学に派遣されることになった。彼は大学在学中の一九一〇年に、画家で芸術研究家のアレクサンドル・ロスチスラヴォフとともに短期間ミラノを訪れたことがあったが、学術研究のための滞在はこれが初めてであった。一九一四年にウストリヤローフはパリとマールブルクを訪れているが、彼の日記を編纂した現代ロシアの研究者ルイバコフによれば、パリ滞在は四月二〇日から五月二三日、マールブルク滞在は五月二六日から六月二三日までで、そこからロシアに帰国している。<sup>34</sup> 本来ならばソルボンヌ大学を訪れた後でマールブルク大学に長期滞在して哲学研究に従事する予定であったが、この時に独露間の緊張が急速に高まったために、ウストリヤローフは帰国を余儀なくされたのである。

マールブルクは当時、新カント派哲学の中心であった「マールブルク学派」の拠点であった。新カント派哲学は同時代のロシア哲学に大きな刺激を与えており、多くのロシア人哲学者がマールブルクを訪れていた。ウストリヤローフの自己形成過程に影響を及ぼした哲学者や思想家の多くが新カント派の強い影響を受けており、彼の指導教官で

あつたヴィシエスラフツェフ自身もマールブルクに留学して、マールブルク学派の総帥ヘルマン・コーエンやパウ・ナトルプから直接の影響を受けていた。<sup>(35)</sup> コーエン自身は一九一二年にはマールブルクを去つていたものの、学生時代に新カント派哲学の洗礼を受けたウストリヤーロフが留学先にマールブルクを選んだのは自然なことであつた。その地で彼は、歴史における国家の役割と意義を絶対化したコーエンの学説を研究した。

パリとマールブルクでのウストリヤーロフの活動が窺われる史料を利用することは困難であつたが、当該期を含むウストリヤーロフの葉書の文面が二〇一四年に翻刻され、その一端を知ることができるようになった。彼はパリでメーデーの祝賀集会を見物し、フランス人弁士の演説だけでなくドイツ人、ベルギー人、イタリア人ら外国人弁士の演説も聞いて関心を示している。またルーブル美術館を訪れたり、フォンテーヌブローを訪問したりしており、フランス文化を満喫していた。<sup>(36)</sup> マールブルクには、ウストリヤーロフより先にモスクワ大学の同僚カラベゴフが滞在しており、モスクワ大学とマールブルク大学との緊密な関係が窺われる。<sup>(37)</sup> 彼はマールブルクでも大学で熱心に講義を聴講していたが、ヘーゲルのドイツ語を学ぶのはひどく難しいと弱音を吐いてみたり、ドイツ語を話すのは難しいと嘆息したりと、家族には留学生活の本音を語っているのは、ウストリヤーロフの人間味を垣間見るようで興味深い。また彼は、現地の新聞を読んで情報を得るとともに、カラベゴフが入手するロシア語紙『ロシア報知 (Русские ведомости)』やカフェにあつた『レーチ (Речи)』を読んでロシアの最新情報に触れることも忘れなかつた。<sup>(38)</sup>

外遊からの帰国後、ウストリヤーロフは学位取得を目指して研究に専念した。一九一五／一六年度に彼は修士学位試験を受けて合格し、一九一六年秋には「プラトンの政治論」と「スラヴ主義者の専制理念」の二つのテーマで試験講義をおこなつた。こうして試験終了後に彼は、モスクワ大学の私講師の資格を獲得した。<sup>(39)</sup> 一九一六年、二五才のウストリヤーロフはモスクワ商業高等専門学校の助手に就任し、大学教師としての道を歩み始めたのである。翌一七年には、モスクワ大学法学部の私講師としてロシア政治思想史講義を担当したほか、シヤニャフスキー記念モスクワ市民大学の講師を務めた。この大学は、陸軍少将でリベラルの教育活動家でもあつたアルフォンスシヤニャフスキー

の遺志で設立された民衆に開かれた大学で、当時はエヴゲーニー・トルベツコイをはじめ、モスクワ大学講師の哲学者イヴァン・イリイン、モスクワ農業高等専門学校講師のアレクサンドル・チャヤーノフ、元モスクワ大学教授の植物生理学者クレメント・チミリヤゼフ、詩人で文学者のヴァレーリー・ブリュエソフらの指導的研究者が講義を担当していた。<sup>(40)</sup>

学位を取得して教職に就くころから、ウストリヤーロフは評論家としての本格的な活動を展開し始めた。すでに在学中から学生向け新聞雑誌に寄稿していたウストリヤーロフの評論活動は教師たちの間でも広く知られており、彼の指導教官のヴィシエスラフツェフは彼に対して、自身が協力していたモスクワのリベラル系新聞『ロシアの朝(Утро России)』に寄稿するよう勧めるとともに、同様の政治的志向を持つ知人の誰かを紹介するよう依頼した。<sup>(41)</sup>『ロシアの朝』紙は進歩党の有力者パーヴェル・リャブシンスキーが発行していた新聞で、発行部数は四万部に達する有力紙であった。リャブシンスキー兄弟やコノヴァーロフらモスクワの有力企業家の資金によって支えられた同紙には、ヴィシエスラフツェフのほかベルジャーエフ、ブルガーコフ、コトリヤレフスキー、トルベツコイら著名な自由主義者が寄稿しており、同紙はリベラル右派の論調をリードする役割を果たしていた。<sup>(42)</sup>

ウストリヤーロフは師の提案に関心を示し、愛国主義と革命的国際主義についてのテーマで二編の評論を書いた。この評論は、一九一四年に訪れたパリで目撃したメーデー集会での経験に着想を得たもので、周到でありながら生き生きとしたものとなった。<sup>(43)</sup>この論考は「現代の審判を受ける愛国主義」と「戦争と道徳」の二編の論説として、ウストリヤーロフの署名入りで『ロシアの朝』紙に相次いで掲載された。<sup>(44)</sup>こうして有力紙にデビューを果たした新進気鋭の評論家は、このうち同紙を中心に評論活動を精力的に展開していくことになる。

自立した教師としてまた評論家として歩み始めたウストリヤーロフは、専門の哲学研究の領域でも独自の発展を示し始めた。ここで主要な活動舞台となったのは、彼が学生時代から参加していたモスクワ宗教哲学協会であった。同協会の積極的な討論者としてのウストリヤーロフの活動を、一九三〇年に彼自身が回顧した文章が残されている。そ

れは一九一五年末の出来事で、宗教哲学協会の会合において会員の宗教哲学者ウラジミール・エルンが、進行しつつあった戦争の哲学について考察した「カントからクルップへ」と題するセンセーショナルな報告をおこなった時の出来事であった。その報告でエルンは、カントは巨大軍需産業クルップに対する責任を有しており、ドイツ哲学の伝統的内在論が凶暴な軍国主義とナショナリズムをもたらし、と主張した。<sup>(45)</sup>多くの参加者はこの報告を「すばらしい」と考えたが、ウストリヤーロフには馬鹿げたものと思われた。彼は、意見を同じくする友人のクリューチニコフやケチエキヤンらとともに討論に立つことに決めた。彼ら若き論客たちは、決して「敗北主義者」ではないがドイツを評価し敬意を表することをやめるわけにはいかない、と主張した。ウストリヤーロフによれば、ドイツの精神的偉大さはこの戦争に対して責めを負うべきであると同時に罪はないのであり、罪深さの中にあってさえ威厳があり偽りのない古代の悲劇の英雄にドイツをなぞらえて、エルンの単純な議論を批判した。こうした批判を承けて開かれた次の会合では、哲学者イヴァン・イリインが報告に立って、エルンの主張に反対する痛烈な演説をおこなった。<sup>(46)</sup>このようにウストリヤーロフは、彼と哲学的思考とともにする友人たちとともに、モスクワの哲学サークルで次第に独自の位置を築き始めたのである。

ウストリヤーロフ自身の思想的立場もまた、戦争という危機の中で次第に明確な形を取り始めた。一九一六年三月二五日に彼がモスクワ宗教哲学協会でおこなった報告「初期スラヴ派の国家の問題」は、広範な学識に裏打ちされた自立した思想家ウストリヤーロフの本格的な登場という点で特筆すべきものであった。この報告は、初期スラヴ派の思想家イヴァン・キレエフスキーとアレクセイ・ホミャコフの国家(Государство)にかんする学説を検討して、彼らによるロシア国家の普遍的使命の考察に着目したものであったが、そこにはウストリヤーロフ自身の思想的立場と同時に代のロシアが直面する現実的・具体的な問題に対する彼自身の関心が色濃く反映されていた。この報告はのちに論文として『ロシア思想』誌に掲載されて大きな反響を呼ぶことになったが、この論文は、初期スラヴ派の思想を分析し考察すると同時に、彼らの言葉を用いながら自身の主張を展開したものととらえることができる。

この観点からみて重要なのは、諸国家の關係についての彼の考察である。ウストリヤーロフによれば、諸国家の原理的平等についてのスラヴ派の学説は、その内部の本質的不平等の学説と併存しており、平和的民族自決の自由の宣言は世界的に選ばれた国家という理論と矛盾するものである。彼は、これらの矛盾を考究することを自らの課題に設定する。<sup>(47)</sup>「諸国民 (Hapouia) は不滅ではなく、個々の人間個人と同じように生まれ、年老いそして死ぬことを、歴史はわれわれに教えている」。彼は、「無益な」、思想性のない、「死んだ」国家の存在は、国家の使命という学説と全く矛盾しない、と論じる。国家の「理念」がすでに使用果たされながらも国家が外見的には存在することはしばしばある。問題は国家理念の本質である。具体的な形で表れた一つの国家理念の本質は、しばしば他の国家理念の本質を否定する。ここに諸国民の友好的協力ではなく、深刻な相互不一致が現れる。<sup>(48)</sup>こうしてウストリヤーロフは、スラヴ派の国家観から出発して、国家間の対立の契機を重視するのである。

民族自決は歴史的に形成された枠組の中で平和裡に進行する過程ではない、とウストリヤーロフは指摘する。彼によれば、ある国民が他の国民の絶滅を要求することがある。世界史の過程は、歴史を作り出す諸国民 (исторические Hapouia) の絶え間ない交替によってのみ実現するのである。歴史は犠牲を要求するのであり、おそらく消滅する国民は滅亡することによって、自らが存続するよりもより多くの価値を人類のために捧げているのである。<sup>(49)</sup>さらにウストリヤーロフは、ホミヤコフとキレエフスキーの「ロシアの特別な世界的使命 (приванне)」についての学説が国家的使命の原理と矛盾するかもしれないという一般的指摘によって覆されてはならない、と論じたうえで、ロシア国家の使命の本質を「真に精神的で内的な特徴」に求めた。<sup>(50)</sup>こうしてヘーゲルの世界観に立つて、ウストリヤーロフは歴史におけるロシアの使命を正当化した。

それと同時に彼は、西欧とロシアの本質についてのスラヴ派の見解が国家的使命の理論とはかわりがないものであると主張した。さらに、現実の試練は祖国の世界的使命への確信を損ねるものではないものの、その具体化の様式に対する見方を修正していると指摘した。<sup>(51)</sup>このように彼は、「世界におけるロシアの使命」というスラヴ派の立場に

拠りながらも、伝統的なスラヴ派的思考に必ずしもとらわれない、リアリズムに立った独自の観点を提示していた。

ウストリヤー・ロフのこうした哲学的立場は、世界戦争の中でロシアがとるべき道についての具体的な提言と密接に結びついていた。同じく一九一六年一〇月に発表された彼の論文「ロシア帝国主義についての問題に寄せて」には、強力なロシア国家を求めるウストリヤー・ロフの志向が顕著に現れていた。彼によれば、理論上は国民が国家を形成することを否定できないけれども、現実には国家こそが単一の国民を形成しているのである。したがって「偉大なるロシア」は何よりも国家でなければならぬ。<sup>(53)</sup>「帝国主義」の理念はすべての現代国家の政策の基礎にあるのであり、「偉大なるロシア」の外交政策は大国の政策、すなわち帝国主義政策でなければならぬ。<sup>(53)</sup>彼は世界戦争を、現存国際秩序の再評価を意味するもの、それと同時に現代の国家組織の「物質的および精神的な力」をテストするもの、と理解した。この観点から彼は、偉大なるロシア国家は「ヨーロッパの自由のための戦争」「帝国主義に対する戦争」「ドイツ軍国主義に対する戦争」といったスローガンと絶縁すべきであると主張した。<sup>(54)</sup>ここでの彼の主張は明らかに、ストルーヴェの「偉大なるロシア」の国家観から非常に強い影響を受けていた。<sup>(55)</sup>しかしウストリヤー・ロフはそこにとどまることなく、ストルーヴェから継承した国家観と現実のロシア国家がおかれていた状況とを「総合」して、新しい方向性を模索することを通じて、ロシア国家の帝国主義的拡張政策を肯定的に評価したのである。

論文「ロシア帝国主義についての問題に寄せて」を掲載した「偉大なるロシアの諸問題」誌の編集部は、この論文が興味深いものであることを認めながらも、著者のすべての命題に意見を同じくするわけではないと付記をつけていた。<sup>(56)</sup>この論文は大きな反響を呼び、早くも同誌翌月号には、ウストリヤー・ロフと同世代の国際法学者アレクサンデル・ラドウィジェンスキーが同論文を批判した論考を発表した。ラドウィジェンスキーによれば、ウストリヤー・ロフは「偉大なるロシア」の理念を「法に対する国家の優位」の視点からとらえているが、国家を法の上位におく観点から安定した法秩序の理念を論じるべきではない。「偉大なるロシア」に必要なのは、好戦的で攻撃的な外交政策ではなく、平和的で文化的な発展の可能性なのであり、「偉大なるロシア」理念は自由で、法にかなった、文化的で、



豊かで平和な国の理念である、とラドウイエンスキーは論じた<sup>(87)</sup>。ウストリヤーロフの独自の立場は、ストルーヴェに影響を受けて「偉大なるロシア」理念を信奉した人々のあいだでさえ、必ずしも無批判に受け入れられるものではなかった<sup>(88)</sup>。

このようにウストリヤーロフは、スラヴ派および『道標』派の思想的枠組を土台として自己形成を遂げた点では、同時代の若きロシア・インテリゲンツィヤの一類型を示す典型的な人物であった。しかし彼の思想的発展はその枠組の中に留まるものではなく、スラヴ派や『道標』派の理念を大きく乗り越えていくことになったのである。

## おわりに

帝政末期の「銀の時代」に青年期を過ごしたニコライ・ヴァシーリエヴィチ・ウストリヤーロフは、トルベツコイ兄弟を通じてソロヴィヨフの哲学を吸収するとともに、同兄弟をはじめベルジャーエフ、ブルガーコフ、ストルーヴェらの最新のロシア哲学を学びつつ、自身の思想的土台を形成していった。彼は当初エヴゲーニー・トルベツコイの影響のもとで成長したが、次第にストルーヴェの思想的立場に接近し、さらに戦争という危機の時代の中で独自の思想的展開を経験していった。彼はストルーヴェの「偉大なるロシア」理念を引き継ぎながらも、それを同時代の列強の勢力図におけるロシアの位置に接合して、国家により高い価値を見出す観点を提示した。ここにリアリストとしてのウストリヤーロフの成長とともに、ロシア的なリベラリズムの伝統とナシヨナリズムの新たな要素とを「総合」して独自の方向性を開拓する彼の思想的発展を見出すことができる。

こうしてウストリヤーロフは、論壇において新進気鋭の論客として登場した一九一六年までに、その思想の骨格を確立したといえよう。この時期に現れた彼の思想的深化は、一九一七年の二つのロシア革命を経て、さらに深く幅広く展開されることになるのである。

一九一六年末、帝政は破局の瀬戸際に立っていた。多くのリベラル知識人と同様にウストリヤーロフもまた、統治システムが変わらなければドイツに対する勝利もありえないことを十分に理解していた。しかし彼は二月一五日の日記の中で、君主制原理の威信が失墜するのは良くないことであり、一九〇五年の革命家がばかげたものであったように、ロシアで革命が起こるのは愚にもつかぬことである、と記した。その直後にラスプーチンが暗殺され、事態はさらに悪化していった。ウストリヤーロフは、フランス革命の歴史がロシアで繰り返されていると感じた。そして、事態がそのように進むならば結末も同じになるだろうと考えねばなるまい、と覚悟した。ウストリヤーロフにとって、またロシアの歴史にとっても、過酷な試練の始まりは間近であった。

- (1) 中嶋毅「革命とロシア・インテリゲンツィヤ——N・V・ウストリヤーロフにみる知の継承と展開」小谷汪之編『歴史における知の伝統と継承』山川出版社、二〇〇五年。
- (2) ここでは文献名を挙げるのみにとどめる。竹中浩「道標転換派と一国社会主義」溪内謙・荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』（木鐸社、一九八四年）、廣岡正久『ロシア・ナショナリズムの政治文化——「双頭の鷲」とイコン』（創文社、二〇〇〇年）、同「ニコライ・ウストリヤーロフと「道標転換」運動」『法学研究』（慶應義塾大学）第七六巻第二十二号（二〇〇三年十二月）、H. Hardeman, *Coming to Terms with the Soviet Regime: The "Changing Signposts" Movement among Russian Emigrés in the Early 1920s* (DeKalb, Illinois: Northern Illinois University Press, 1994); Т. Краус, *Советский термидор: духовные предпосылки сталинского поворота 1917-1928*. Булашефт. 1997; タブシ・クラウス著（堀江則雄訳）『ソヴィエト・テルミドール——現代ロシア政治の源流』（東洋書店、二〇〇三年）。研究史上の位置づけについては、中嶋「革命とロシア・インテリゲンツィヤ」一九〇頁をみてほしい。
- (3) Д. А. Быстрицкая, Николай Васильевич Устрялов // Кипо. № 3 (6). 1998; Ее же. Мирозозрение и общественно-политическая деятельность Н. В. Устрялова (1890-1937) // Новая и новейшая история. № 5. 2000.
- (4) В. К. Романовский, Жизненный путь и творчество Николая Васильевича Устрялова (1890-1937). Москва. 2006; Его же. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. Нижний Новгород. 2010.

- (5) К. А. Шапошников. Из родословной Устряловых: По материалам Российского государственного исторического архива и отдела рукописей Пушкинского дома/ Николай Васильевич Устрялов. Калужский сборник. Выпуск 6. Калуга, 2014.
- (6) Там же. С. 151-152.
- (7) Там же. С. 153; Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 37.
- (8) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 38.
- (9) Д. А. Быстрицкая. Духовно-культурные основы деятельности Н. В. Устрялова/ Николай Васильевич Устрялов. Калужский сборник. Выпуск 2. Калуга, 2007. С. 21-22.
- (10) Йуэман・ウストリヤーロフの生年については情報が錯綜しており、シャーボシニコフが一八一八年、ロマンフスキーは一八一九年、フェイストリアンツェウアが一八二〇年と記載している。本稿では、Йуэманの誕生日を一八一八年十一月二十五日と記しているシャーボシニコフに従った。彼によれば、Йуэманの墓碑銘には「一八六一年五月四日に生誕から四三年で死去」と記われており、生年が一八一八年であることが示されている。К. А. Шапошников. Некрополь семьи Устряловых (Организация - Санкт-Петербург - Калуга)// Николай Васильевич Устрялов. Калужский сборник. Выпуск 5. Калуга, 2011. С. 174-175.
- (11) Шапошников. Из родословной Устряловых. С. 154-156.
- (12) Шапошников. Некрополь семьи Устряловых. С. 172.
- (13) Там же. С. 176.
- (14) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 38-39; Быстрицкая. Духовно-культурные основы деятельности Н. В. Устрялова. С. 22-23.
- (15) А. Е. Шапошников. 《Исповедь》 В. И. Устрялова// Николай Васильевич Устрялов. Калужский сборник. Выпуск 2. С. 151-152.
- (16) М. В. Устрялов. Последняя жизнь Калужан в годы войны. Дневник врача 1941-1944 гг. Калуга, 2010. С. 5-8.
- (17) Н. В. Устрялов. Былое - революция 1917 г. (1890-е - 1919 гг.): Воспоминания и дневниковые записки. Москва, 2000. С. 29-30.
- (18) Там же. С. 31.
- (19) この問題に関しては、根村亮『道標』に「ついで」『スラヴ研究』第三九号（一九九二年）を参照。
- (20) Устрялов. Былое - революция 1917 г. С. 45.
- (21) Там же. С. 41.
- (22) Быстрицкая. Духовно-культурные основы деятельности Н. В. Устрялова. С. 27. Николай・ウストリヤーロフの未公開個人文書は、ニコライの次男セルゲイの妻エリザヴェータ・イヴァーノヴァ・ウストリヤーロヴァが所蔵するものである。
- (23) Устрялов. Былое - революция 1917 г. С. 56.

- (24) Там же. С. 54-55.
- (25) Там же. С. 61, 64.
- (26) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 46.
- (27) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 65. 『カントとブルクス主義』のロシア語訳は一九〇六年に刊行されており、ウストリヤロフはこれを讀んだのかと思われる。Н. А. Дмитриева. Русское неокантианство: «Марбург» в России. Историко-философские очерки. Москва. 2007. С. 123.
- (28) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 93, 99. じれらの教授陣のなか、トルベツкой、ノヴォロツェフ、ブルガコフ、キスチャコフスキーなどは一九一一年に、時の文部大臣カッソンによる大学に対する圧力強化を受けて、モスクワ大学を辞職した。
- (29) Там же. С. 98-99.
- (30) Там же. С. 101-103.
- (31) Быстрицкая. Духовно-культурные основы деятельности Н. В. Устрялова. С. 32 (ウストリヤロフ個人文書からの引用)。
- (32) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 73-74; Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 61-62.
- (33) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 56-57.
- (34) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 5, 17.
- (35) Дмитриева. Русское неокантианство: «Марбург» в России. С. 195-197.
- (36) Открытки Н. В. и М. В. Устряловых 1909-1936 гг.// Николай Васильевич Устрялов. Кауужский сборник. Выпуск 6. С. 186-187.
- (37) Там же. С. 188-189.
- (38) Там же. С. 191-192.
- (39) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 60.
- (40) Там же; Быстрицкая. Духовно-культурные основы деятельности Н. В. Устрялова. С. 35, 54.
- (41) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 75.
- (42) Романовский. Николай Устрялов. От либерализма к консерватизму. С. 63-64.
- (43) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 76.
- (44) Утро России. 31 января 1916 г. С. 1; 7 февраля 1916 г. С. 1.
- (45) Устрялов. Былое – революция 1917 г. С. 111. Ельонの報告は彼の論文集『剣と十字架』(一九一五年刊)に収録された。この論文は、一九八九年の『哲学の諸問題』誌第八号に翻刻された(прим. 235)。
- (46) Там же. С. 112-113.

- (47) Н. В. Устрялов. Национальная проблема у первых славянофилов// Русская мысль. 1916. кн. X (октябрь). Отд. 2. С. 3.
- (48) Там же. С. 8-9.
- (49) Там же. С. 10.
- (50) Там же. С. 14, 17.
- (51) Там же. С. 14, 19.
- (52) Н. В. Устрялов. К вопросу о русском империализме// Проблемы великой России. 1916. № 15. С. 1-2.
- (53) Там же. С. 3.
- (54) Там же. С. 4-5.
- (55) Струве В. П. «Великая Россия» - понятие и анализ. В кн.: «Великая Россия» - понятие и анализ. М.: Наука, 1991. С. 1-2.
- (56) Устрялов. К вопросу о русском империализме. С. 5.
- (57) А. Давыдовский. Идеи Великой России и агрессивный империализм (Ответ Н. В. Устрялову)// Проблемы великой России. 1916. № 16. С. 2-3.
- (58) 第一次世界大戦を契機として、ロシアにおいてナショナリズムや愛国主義に関する論争が展開されたことについては、次の論文を参照。А. А. Ермичев. Вопрос о патриотизме в русской мысли начала первой мировой войны// Вестник Русской христианской гуманитарной академии. 2014. Том 15. Выпуск 4. С. 179-190. Устрялов В. П. «Великая Россия» - понятие и анализ. М.: Наука, 1991. С. 1-2.
- (59) Устрялов. Былое - революция 1917 г. С. 132-133.